特定非営利活動法人 シビルNPO連携プラットフォーム

CNCP通信 Vol 50

平成 30 年 6 月 12 日発行

●CNCP はあなたが参加し楽しく議論し活動する場です●

シリーズ「土木ということば」

第２回 日記の「土木」

中国から「土木」ということばが伝来した後、平安後期から鎌倉初期に公卿が記した日記は漢文体であることから漢語の「土木」が使われている。

藤原行成（972～1028 年）の『権記』長保四年（1002 年）三月十九日「仍營造之間、重制過差、不費土木之功力、可減柱梁之高大」は宮廷の造営費用を倹約することについて、平信範（1112～1187 年）の『兵範記』久安五年（1149 年）十月廿五日「去夏企土木、其功速終、今日被遂供養也」は供養のための御堂を造営したこと、の記述である。

藤原定家（1162～1241 年）の鎌倉初期の日記『明月記（自筆本は国宝）』には、嘉禄二年（1226 年）六月五日「下人説、夜火果而是最勝光院云々（中略）土木之壮麗、荘厳之華美、天下第一之佛閣也、惜而可惜、悲而可悲、已矣云々、遺青侍宗弘、令見彼御堂、未時歸来、南西之諸門并半作破壊、塔不撓、預承仕等悲泣之外、人不見云々、面々述懐、佛供燈明断絶、諸庄兵士一人不参、夜半許御堂火付之由有告者、驚出而見之、五六人許奔出、一両承仕、寧及是非哉、佛像已下不及奉取出云々」とあり、現代語で要約すると「造りが大きく立派で装飾も美しい天下第一の仏閣である最勝光院[*1] も建春門院・後白河院没後は仏供灯明もとどこおり、諸荘からは兵士一人も出仕しない状態であり、放火で仏像なども取出すことができず、ただ塔のみが焼失を免れたという」である。

これら三例の「土木」は建物を造ること、または建物の造り、を表している。

*1:最勝光院跡は平安京郊外の三十三間堂の南、現京都市東山区下池田町にある

（土木学会土木広報センター次長 小松 淳）

Vol.50 コンテンツ

巻頭言	「混沌こそ本質」そして「Ｗｉｎ－Ｗｉｎ」の難しさ	辻田 満	2
コラム	知恵の共有を進めよう	青山 俊樹	3
明治 150 年企画（10）	さらに 10 年後の「明治 160 年」に思いを寄せて	有岡 正樹	4
部門活動紹介	うなぎを守りながら食文化を絶やさない世の中にしたい	小重 忠司	6
研究会報告	地域の CCRC 度を評価し課題を見付けよう	神 弘夫	7
シドニー視察旅行記（7）	～シドニーハーバートンネル	橋爪 伸浩	9
会員からの投稿	「過 則 勿 憚 改」	木村 達夫	11
サポーターからの投稿	最近の PFI/PPP の動向について思うこと	大西 正光	12
イベント案内	第 15 回啓発セミナー LIME Japan		14
事務局通信			15